

# 中国少数民族地域における初等教育社会系教科の実態

## —内モンゴル自治区ナイマン旗ゴリバンホア中心小学校を事例に—

紅蘭

キーワード：少数民族，初等教育，社会系教科，道德教育，内モンゴル，中国

### 1. はじめに

中国には55少数民族がある。中国における少数民族は、民族的少数者（人種的少数人）を指しており、漢族以外のウイグル族、チベット族、朝鮮族、モンゴル族、チワン族などである（岡本，1999）。少数民族は人口が少ないものの、高原や砂漠地域などの南西部、北西部と東北に分布し、その居住範囲は全国土の64%を占める。本稿では、その中からモンゴル族を取り上げる。モンゴル族は、内モンゴル自治区、シンチアン（新疆）ウイグル族自治区、カンスー（甘肅）省、リャオニン（遼寧）省、チーリン（吉林）省、ヘイロンチアン（黒龍江）省、チンハイ（青海）省、ホーペイ（河北）省など8省・自治区に分布している。本稿で取り上げる内モンゴル自治区にはモンゴル族が特に集中して生活している。伝統的なモンゴル語を使い、自民族の伝統・文化を守りながら世界の流れに後れないように生きていくことを今日のモンゴル族の人々は求められている。本稿ではその児童が社会に出る前の準備として初等教育の社会系教科で何を教えられているのか、その実態と教科内容を検討する。

内モンゴル自治区における小学校での教育実態を現地調査のもとに検討する。現地調査は2012年の3月下旬に内モンゴル自治区トンリャオ（通遼）市ナイマン（奈曼）旗<sup>1)</sup>ゴリバンホア（固日班花）ソム（蘇木）<sup>2)</sup>にあるゴリバンホア中心小学校で実施した。授業見学のほか、児童や教員、保護者に対するアンケート調査を行い、社会系教科の「品德と生活」や「品德と社会」などが教育現場でどのように行われているかを分析する。また、あわせて同学校の独自設定課程として行われている「習慣」、「遊び」、「法」などを紹介する。

### 2. 研究対象と調査の概要

#### （1）地域の概要

図1はゴリバンホア中心小学校の位置を示したものである。トンリャオ市は内モンゴル自治区東部に位置し、南北は北緯42°15′から45°41′、東西は東経119°15′から123°43′の範囲にあり、その長さはそれぞれ418キロメートルと370キロメートルである。その総面積は59,535平方キロメートルである。

1949年4月にはジリム盟と呼ばれ、内モンゴル自治区に属していたが、1969年にチーリン省に属し、その後、1979年7月に再び内モンゴル自治区に属するようになった。1999年にジリム盟の名称がトンリャオ市になり、ホルチン（科爾沁）区、ホルンゴル（霍林郭勒）市、ホルチン左翼中旗、ホルチン左翼後旗、カイルー（開魯）県、フレ（庫倫）旗、

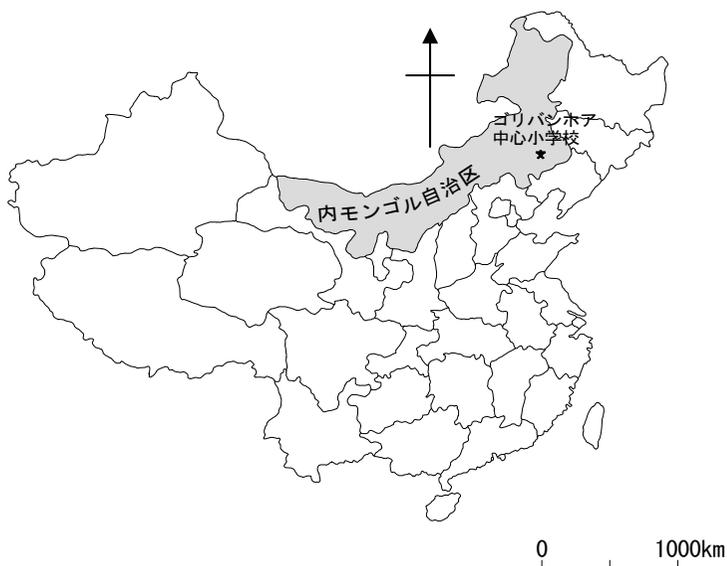


図1 調査対象地域の位置

出所：筆者作成

ナイマン旗、ジャルド（扎魯特）旗の行政区によって構成される（図2）。

ナイマン旗は図2に示すように、トンリャオ市の南西部、ホルチン沙地の南に位置する。南北は北緯 42°14′から 43°32′，東西は東経 120°19′から 121°35′の範囲にあり，南北 140 キロメートル，東西 68 キロメートル，総面積は 8137.6 平方キロメートルである。

ゴリバンホアソムはトンリャオ市北西部，ナイマン旗の南東部の北緯 43°50′から 45°50′まで，東経 119°14′から 125°57′までの領域がある。ゴリバンホアソムには，22 ガチアー（嘎查）<sup>3)</sup>，3548 戸，1.46 万人が住んでいる。そのうち，モンゴル族は 1.21 万人であり，82.8%を占めており，モンゴル族と漢族が混合して生活している。モンゴル族が多い地域であり放牧生活が主として行われて，現在も半農半牧の生活をするモンゴル族も多い。写真1はゴリバンホアソム中心街の写真である。経済の発展により自動車の利用も多くなっているが，伝統的な生活を行い，馬車でソムの中心地に通う人も多い。



写真1 ゴリバンホアソム中心街

出所：2012年3月23日筆者撮影



写真2 ゴリバンホア中心小学校の校内

出所：2012年3月20日，筆者撮影



図2 内モンゴル自治区トンリャオ市  
出所：筆者作成

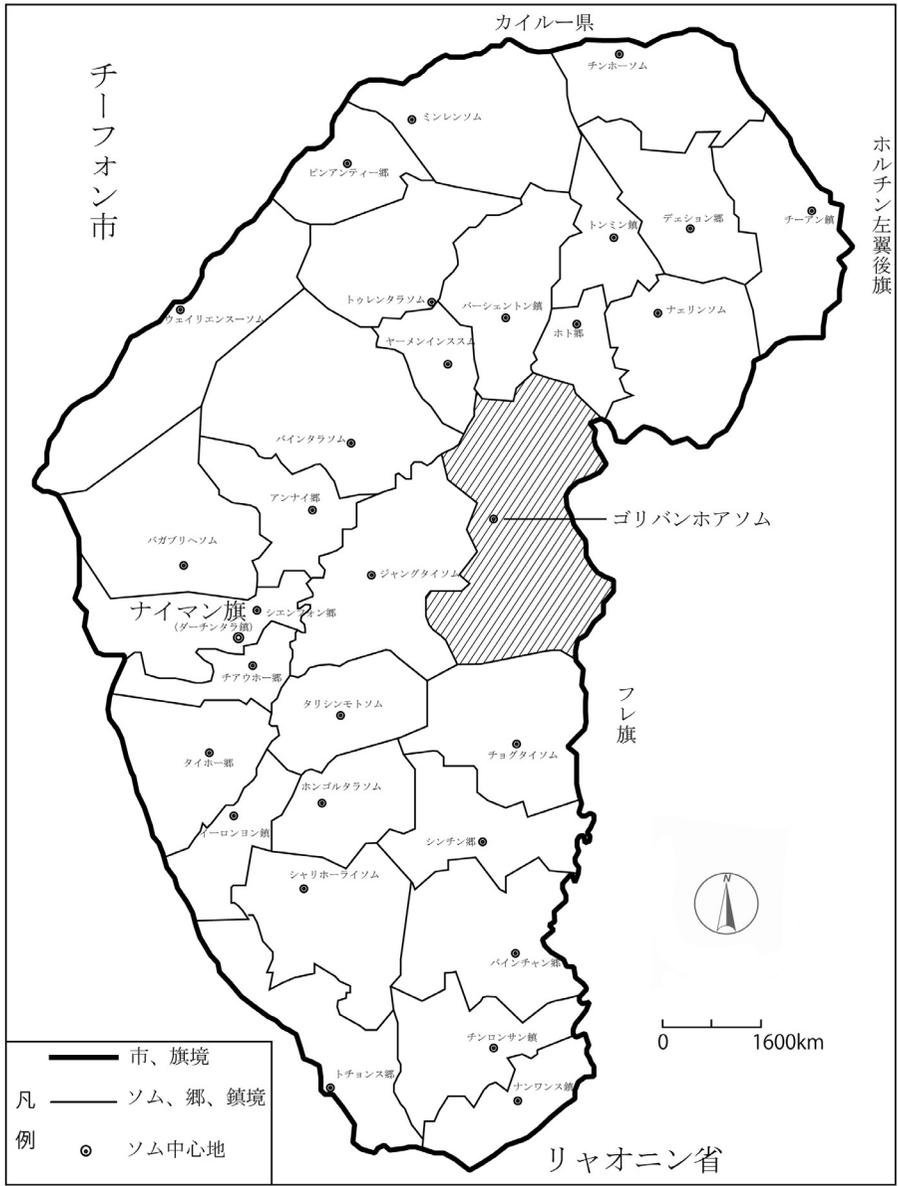


図3 内モンゴル自治区トンリャオウ市ナイマン旗  
 出所：筆者作成

## (2) ゴリバンホア中心小学校の概要

ゴリバンホア中心小学校は図3に示すようにゴリバンホアソムの中心地になるバインタラガチヤーに位置している。ゴリバンホア中心小学校は1956年に設立され、小学校と中学校が併設されていた。1985年に中学校がほかの場所に移動し、現在は小学校のみである。

調査時点における小学校の在籍児童数は445人であり、男子が51%を占め、女子が49%を占めている。表1が示すように、近年、児童数は減っている。少数民族には1人っ子政策が行われてないが、経済的理由から少子化が進んでいる。また合併により児童たちが旗または市の学校に通っていることがこの学校の児童数が少なくなっている要因と考えられる。

教員は30人で、校長を含む管理職と事務員は48人であった。教員は29人がモンゴル族で、残り1人は漢族である。漢族の教員が入ったのはその教員がはじめてであり、2000年以後からである。

学校の目的には、地域の特徴にあった民族の言語、文字、習慣、伝統を守り、発展することと自民族を愛することが掲げられている。また2012年3月9日に行われた「民族文化の特徴的の学校を建設し、民族の教育を発展させる」会議では、ゴリバンホア中心小学校の目標を「民族文化の特徴的の学校」になるように建設することが決定された。

ゴリバンホア中心小学校の校内には、クラス用の建物が3棟あり、管理者と教員用の建物が2棟、宿舎が3棟、コンピューター室と会議室が1棟、食堂が1棟、倉庫が1棟である(写真2)。図書室も併設され1人の司書が配置されている。

ゴリバンホア中心小学校はこの地域の中心小学校であり、モンゴル族だけではなく、他の民族の児童もこの学校に通っている。この地域に幼稚園が設置されていないかわりに、この小学校の就学前教育では、学前班(第1学年前のこと)と呼ばれるクラスが設置されている。これは幼稚園の不足を補うため小学校に附設された幼児クラスである。学前班では、モンゴル文字の基本的な字母(チアガントロガイ)やモンゴルの昔話、遊びを中心とした教育がなされている。

多くの児童は学校と家が離れており、そのために宿舎が併設されている。宿舎では12人1組みで生活を行っている(写真3)。毎週の金曜日の午後に学校が終わり、児童たちは自宅に帰って、日曜日に学校にもどってくる。寄宿舎には学前班から第6学年までの児童が一緒に生活を送っている。自宅が遠い教員は、教員宿舎で生活している。



写真3 宿舎

出所：2012年3月23日、筆者撮影



写真4 第4学年の「品德と社会」の授業

出所：2012年3月22日、筆者撮影

表1 ゴリバンホア中心小学校の在籍児童数

学年	組	人数	女	男
学前班	小班	28	18	10
	大班	38	19	19
第1学年	1組	31	16	15
	2組	32	15	17
第2学年	1組	24	10	14
	2組	24	11	13
第3学年	1組	25	15	10
	2組	27	16	11
第4学年	1組	32	21	11
	2組	33	10	23
第5学年	1組	33	12	21
	2組	32	15	17
第6学年	1組	42	19	23
	2組	44	20	24
合計		445	217	228

出所：筆者作成

社会系教科を学んだことがあるかについて質問した。

### (3) 調査の概要

ゴリバンホア中心小学校において社会系教科がどのように行なわれているかの調査を2012年3月20日から23日までの4日間にわたり、第4学年、第5学年と第6学年の授業参加にし、またアンケート調査を実施した。調査の児童に対するアンケートは少数民族に対する教育制度そのものが実際に行われているか、児童たちが社会系教科に興味・関心があるか、児童たちが何を学びたいか、自民族の伝統・文化を守る自民族の歴史を学ぶ必要があるかについて質問した。

保護者に対するアンケートでは保護者たちが自民族の言語で児童たちの育成を望んでいるのか、児童たちの学校の生活あるいは社会系教科についてどのぐらい知っているか、保護者たちが初等教育で

### 3. アンケート調査の考察

アンケートを行った児童は、第5学年の男子17人、女子15人である。年齢にバラツキがあり、12歳の児童が8人、13歳の児童が14人、14歳の児童が9人、15歳の児童が1人であった。5歳から入学した児童が1人、6歳から入学した児童が16人、7歳から10人、8歳から2人、その他が3人であった。その他3人が4歳、9歳と10歳であった。50%の児童が6歳から入学している。進級率も100%とはいえないこともあり、このような年齢差が生じている。

児童たちの教科の好き・嫌いについての質問に対して、8つの教科のうち児童たちが一番好きな教科の順番で1を選んだ場合は8点、2を選んだら7点、以下順に8が1点というように配点し点数化した。その結果、モンゴル語がもっとも高く215点、続いて算数201点、漢語189点、そして品德と社会は81点で一番好きではない教科であった(表2)。

児童が「品德と社会」のどんな内容を学びたいかを調査した。児童たちの回答には「第5学年(下)1, 2単元の内容が理解しやすいから一番いいと思う」「成長の楽しみが分かった」「古今のことが分かった」であった。また「品德と社会」のイメージについては、「品德と社会」のイメージが理解しやすいと考える児童が24人で、75%を占めて、理解しにくいと考える児童が8人で、25%を占めている。児童たちが暗記することが嫌だからこの教科が好きではないか、社会に興味・関心がないから好きではないか、出身地の特徴が書かれてないから嫌になったか、モンゴル語と算数のように重視されてないから嫌になったかという質問が考えられた。

児童たちが「品德と社会」で何を学びたいかについては、「動植物の由来を知りたい」「モンゴル人の歴史と習慣を知りたい」「交通安全を学びたい」「人類の起源史を学びたい」「未来のことを学びたい」「道徳的な人になりたい」「漢族の歴史と習慣を学びたい」「私たちの地球という内容を学びたい」「世界どんな民族が一番最初に形成したかを知りたい」という回答があった。

児童たちがどんな民族の歴史に興味をもっているかについて質問をした。モンゴル族の

表2 児童に対する好きな教科の順番

教科	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	総合点
モンゴル語	128	49	18	10	4	3	2	1	215
算数	72	77	24	10	8	6	4	0	201
漢語	16	35	102	25	8	3	0	0	189
体育	8	56	6	30	8	18	10	3	139
絵画	16	7	0	30	20	18	18	3	112
英語	0	0	18	40	28	12	2	9	109
音楽	16	0	18	5	32	15	14	6	106
品德と社会	0	7	0	5	24	21	14	10	81

出所：現地調査により筆者作成

歴史に興味がある児童が 23 人、漢族の歴史に興味があるのが 6 人、ほかの民族の歴史に興味あるのが 3 人であった。なぜという質問には「モンゴル族だから自民族の歴史を知りたい」という児童が 25 人で、「満州族とチベット族の住んでいる地域に行ってみよう」「ほかの民族の歴史を学ぶのがよい」という児童が 2 人、「私が漢族だから漢族の歴史を知りたい」「漢語が簡単だから」「漢語が好きだから」「孔子について学びたい」という児童が 5 人であった。

「品德と社会」が児童たちに理解しやすいが、児童たちの興味・関心があるモンゴルの歴史について内容が少ないということが 1 つの原因だと考えられている。そして、後述するようにモンゴル学校の総授業時数には社会系教科の「品德と社会」の授業時数は 3.3% しかなく、初等教育ではモンゴル語 (18.8%)、算数 (12.5%)、漢語 (10.0%) の教育が重視されていることが分かる。

保護者の調査については 30 人に調査を行った。保護者は、女性 13 人で、男性は 17 人である。また 30 人の内、29 人がモンゴル族で、1 人が漢族である。職業は教師、営業者、牧業者、農業者、公務員、医者と多様である。年齢構成は、20 歳代は 4 人、30 歳代が 6 人、40 歳代が 15 人、50 歳代が 5 人であった。

なぜ保護者たちが児童にゴリバンホア中心小学校を選んだのかについて質問した。自民族語を学ぶことがあたりまえのことという回答が多かった。中国の少数民族教育制度により、少数民族が自民族言語、伝統、習慣を守っていくことができる。1 人の漢族の人の回答は「昔も、今も、この近くの学校はすべてモンゴル学校であるから児童がモンゴル学校に通っていた」であった。この地域の中心とした小学校では、各民族の児童たちが通っていることが分かる。

保護者たちが現在初等教育での「品德と社会」、及びその内容について知っているかを調査した。今日の初等教育には「品德と社会」を教えていることが知っている人が 23 人で 77% を占めている。知らない人が 7 人で 23% を占めている。「品德と社会」について具体的な内容を知っている人は 47% であり、知らない人が 53% と半数を超えることが分かる。初等教育では、「品德と社会」が教えられていることが知っている人が多いが、具体的に何を教えているか知らない人が多かった。

内モンゴル自治区の初等教育ではいつから社会系教科が使用されたかについて調査を行った。回答では、20 歳代と 30 歳代の人が初等教育で「地理」と「歴史」を学んだことがあるが、40 歳代と 50 歳代の人が初等教育では「地理」と「歴史」を学んだことがないと分かる。1960 年代に生まれた人々が初等教育の段階では「地理」と「歴史」を学んでなかったことと 1970 年代と 1980 年代の人々が初等教育で「地理」と「歴史」を学んで、1990 年代以後生まれた人々が初等教育では「社会」を学んだということが考えられた。

#### 4. 授業カリキュラムの実態

表3はゴリバンホア中心小学校の時間割表をもとにまとめた授業時数である。第1学年から第6学年まで、「モンゴル語」は1440単位であり、総授業時数の18.8%を占める。以下「算数」960単位(12.5%)、「漢語」768単位(10.0%)、「英語」384単位(5.0%)、「品德と社会」256単位(3.3%)、「品德と生活」128単位(1.7%)、「習慣」192単位(2.5%)「遊び」256単位(3.3%)「法」192単位(2.5%)である。ゴリバンホア中心小学校では社会系教科として「品德と社会」、「品德と生活」の授業時数は384単位であり、総授業時数の5.0%を占めている。本学校の独自設定課程として行われている「習慣」、「法」の授業時数も384単位であり、5.0%を占めている。

「習慣」については、正しくは「モンゴル族の習慣」である。略称して「習慣」とされている。「習慣」では主に、民族の歴史、文化、習慣、生活用品の名称などを教えている。「情報」ではコンピューターの教育がなされている。低学年の「遊び」については、モンゴル相撲の先生がモンゴル相撲を教えている。または、シアタル(モンゴル将棋)が取り入れられている。毎年、ナイマン旗の各モンゴル族の小学校から数人選ばれ、モンゴル相撲とシアタルの試合が行われている。

表4は児童の1日の生活例を示したものである。調査を行った時期には、朝5時30分に起床し、5時50分から朝の体操、6時10分からは朝の自習、6時50分から朝食の時間、7時30分から掃除となっている。授業は40分で行われ、第1限目は朝8時から始まり、午前中は4限目まで行われる。昼休みは11時30分から13時20分までである。午後は13時20分から始まり、10分間準備時間があり、第5限目は13時30分から始まる。授業は第7限目の15時50分まで行われる。16時からは自由時間であり、夕食16時40分からである。夜は自習(1)が18時10分から、自習(2)が19時からなる。就寝時間は19時40分となっている。

#### 5. 社会系教科の実際

3月22日に見学した「品德と生活」と「品德と社会」の授業を詳細に報告するとともに考察を行う。「品德と生活」は第1学年2組、「品德と社会」は第4学年2組、第5学年2組、第6学年1組でそれぞれ見学した(表5)。

表3 内モンゴル初等教育の授業時数

学年	各教科の授業時数																	
	モン ゴル 語	漢 語	算 数	英 語	品 徳 と 社 会	品 徳 と 生 活	科 学	音 楽	絵 画	体 育	習 慣	書 写	情 報	遊 び	法	ク ラ ス 会	特 別 活 動	総 授 業 時 数
第1学年	256	128	160	—	—	64	—	64	64	128	32	32	—	128	32	32	160	1280
第2学年	256	128	160	—	—	64	—	64	64	128	32	32	—	128	32	32	160	1280
第3学年	256	128	160	96	64	—	64	64	64	96	32	32	—	—	32	32	160	1280
第4学年	224	128	160	96	64	—	64	64	64	96	32	32	32	—	32	32	160	1280
第5学年	224	128	160	96	64	—	64	64	64	96	32	32	32	—	32	32	160	1280
第6学年	224	128	160	96	64	—	64	64	64	96	32	32	32	—	32	32	160	1280
総時数	1440	768	960	384	256	128	256	384	384	640	192	192	96	256	192	192	960	7680
割合(%)	18.8	10	12.5	5	3.3	1.7	3.3	5	5	8.3	2.5	2.5	1.3	3.3	2.5	2.5	12.5	100

出所：時間割表のまとめにより筆者作成

表4 1日の生活スケジュール（3月～5月）

時間	内容
5:30---5:50	起床時間
5:50---6:10	朝の体操
6:10---6:50	朝の自習
6:50---7:30	朝食
7:30---7:50	掃除
7:50---8:00	準備時間
8:00---8:40	1限目
8:50---9:30	2限目
9:30---10:00	課間の体操
10:00---10:40	3限目
10:50---11:30	4限目
11:30---13:20	昼休み
13:20---13:30	準備時間
13:30---14:10	5限目
14:20---15:00	6限目
15:10---15:50	7限目
16:00---16:40	8限目
16:40---17:10	夕食
18:10---18:50	夜の自習 (1)
19:00---19:40	夜の自習 (2)
19:40---20:00	就寝時間

出所：現地調査により筆者作成

第1学年の「品德と生活」の授業は「私の家族と友人」という単元のまとめであった。児童たちはまだ文字を十分に読めず、暗記を中心と授業であった点が一番気になった。教育実践の過程で教師は児童の反応や認識のあり方などを受け止め、自らの働きかけの行為を反省的に捉え返し、これを組み替えていく（木村，2012）。したがって、教科における「読み」の問題を考え、暗記ではなく、国語（少数民族国では母語である）教育の必要性を知る。認識の3段階論は、現場の教師によって「直観—分析—直観」という構図で理解されていたが、分析の在り方、直観のあり方について理論的・抽象的な議論ではなく、現実の児童を対象とした具体的な現場での問題状況の克服を目指す議論が行われた。直観の問題について、低学年の児童たちには教科書に書かれた身近でない事実を「生活経験の多寡」に応じて、抽象的、観念的な

言葉を理解できるように教える（木村，2012）。そういうことで第1学年の児童たちにこのような暗記するだけの内容を行うより、児童たちが自分自身で経験し、使い方、読み方、書き方などを学んだりして、遊んで学ぶという学び方が望まれる。

第4学年の「品德と社会」の単元は「地域の特徴」であった。「地域の特徴」，その中に第3節の故郷の愛情という内容，またその中の故郷のおいしい食べ物（第4学年（下）の22ページ）が教えられることになった。この授業で，前回の練習の問題紙をよく利用することが強調されて，この授業の目標について，故郷というと，故郷が全国を指していること，また地名については四川省，雲南省，南京などを地図から探してみる。後はそれらの地域が私たちの出身地のどの方向に位置しているのかを同じグループの児童たちが討論し，その意見を発表する学習が行われた。最後は私たちの故郷（出身地を指している）の食べ物を紹介する。中国国内の異なる地域の特徴的な食べ物を紹介し，自分自身の生まれた地域の特徴的な食べ物について発表し，なぜ私たちがこの食べ物を食べているのかを討論する。その結果が地域の特徴に合わせて私たちの寒いところでは主に肉と乳製品を食べて，湿度が高い四川省では辛いものを食べていることに気づかせる。この授業は写真4のように4人か5人のグループを分けて行われている。各グループでは児童たちが積極的に相談し，先生の質問に答え，一斉の聞くだけの授業ではなかった。この授業を通して児童たちには地域の文化，習慣を知り，自分の故郷の特徴的な食べ物が紹介できるようになること，また地理的には中国の国内の地図を利用させる工夫が考えられる。他民族文化を学ぶことは，他民族とその文化，アイデンティティを尊重する道徳の内容にもつながっている。

第5学年は「品德と社会」（5年生 下）の「古今を探求する」，その中の「漢字と書物の物語」の授業を見学した。今回の授業の内容は，前回の内容を復習し，目標として漢字と書物の発展から中国の四大創造を理解する。生活の中のものを記載するため，漢字が3000年前から作られた。他民族の文化を理解し，文字，言語を尊重するという順番で紹介

表5 現地調査での授業見学の概要

参観日	学年	クラス	教科	単元 (内容)	学習形態	児童数
2012年3月22日	1年	1年2組	品德と生活	私の家族と友人	一斉	32
2012年3月22日	4年	4年2組	品德と社会	1章地域の特徴 3節故郷の愛情	グループ	33
2012年3月22日	5年	5年2組	品德と社会	2章古今を探求する 4節漢字と書物の物語	グループ	32
2012年3月22日	6年	6年1組	品德と社会	2章人類の家 1節一つだけの地球	グループ	42
2012年3月23日	2年	2年2組	法	少年先鋒隊活動	一斉	24
2012年3月23日	4年	4年1組	法	少年先鋒隊活動	グループ	32

出所：筆者作成

された。漢字の特徴と発展、書物の始めなどを紹介し、モンゴル文字の特徴を比較して紹介した。この授業では、中国の漢字の由来を紹介した歴史の内容と他民族の文化、言語を尊重する道徳的内容も含まれていた。

第6学年では、「品德と社会」（6年生 下）の「人類の家」、その中「一つだけの地球」の授業が行われた。この授業の目標は、地球の圧力がますます強くなっていること、その原因は人口が多く、樹林が伐採されていること、ごみの問題、汚染などの説明がなされた。また、教科書の道徳的問いを分析し、自分の出身地域の1980年代からの状況を児童たちに紹介した。この地域では2000年頃まで5種類の家畜が数えないほど多く飼われていた。砂嵐が強くなることにつれて山羊が環境を破壊しているとみなされ政府の命令で、一部地域では、山羊がすべて政府によって処分された。近年、化学工場が建設され、環境の汚染もみられる。この授業では、地理的に環境を破壊しない、歴史的に自民族地域の過去を紹介し、道徳的に人類が生活しているこの地球を守るということであった。自分の地域を守る、環境を破壊しない、地球を守ることが人々の責任であると授業のまとめがなされた。

## 6. 道徳教育の実際

今回の現地調査では第2学年と第4学年で「法」の授業を見学した。そこでは、児童たちに愛国教育を行い、お互いに団結し、公共活動に積極的に参加し、自分自身の特徴を知り、自信をもち、障害の児童でも平等的に成長することが注目された。黒板の上にモンゴル語で「自分を信じて、自分を愛して、自分でやる」と書かれている。このようにクラスごとに黒板の上に道徳的な内容が書かれており、道徳教育が常に重視されていると分かる。

今は中国の教育政策により学校でも道徳教育が行われている。3月20日にゴリバンホア中心小学校の少年先鋒隊活動の総指導員、児童の心身健康の指導員が児童に賞状と賞品を配ることがあった。賞状には「2011—2012年の学年に公共活動に積極的に参加したことを奨励する」と書かれている。公共活動というのは、学校の衛生を積極的にしていることや先生の手伝いをするのと労働に積極的に参加するなどのことである。このような活動に積極的に参加した児童たちには賞状と賞品を配ることはモンゴル人の教育方法の3種類の1つである罰と激励の奨励が行われていることが分かる。

学校に入ると児童たちが先生たちにしっかりとあいさつすることが非常に好印象であり、「品德と社会」の教科で学ぶだけでなく実践を行う必要があると考えられた。

クラスの中には左からチンギスハン、フビライハンから毛沢東までの有名な人の紹介が掛けられている。後ろのホワイトボードにはクラスの児童たちの写真と公共活動に積極的に参加している児童のことが書かれている。

この学校では教科担任制が実施され、「品德と社会」が第3学年から第6学年まで1人の先生が教え、「法」、「品德と生活」も同じように1人の先生が教えている。

また、ゴリバンホア中心小学校では、課間体操の時間には、月曜日は中国の国旗が上げることがされている。火曜日と木曜日はモンゴル族の特徴的な踊りのアンダイをしている。

水曜日と金曜日は普通のラジオ体操をして、雨や雪の日はしないことになっている。しかし、課間体操の時間には、児童たちがクラスの衛生をしっかりとしていくこともある。

## 7. おわりに

ゴリバンホア中心小学校では漢語からモンゴル語に翻訳し出版された教科書そのものを使用し、中国の教育制度と一致している。

アンケート調査により、児童たちが「品德と社会」が好きではないことが明らかとなった。その理由として「品德と社会」の授業時数が少ないこと、児童たちが学びたい、児童たちが興味・関心がある自民族の歴史、伝統・文化の内容がないことが指摘される。保護者たちは児童が自民族語で学ぶことを望んでいる。保護者たちは現在初等教育で「品德と社会」が行われていることを知っているが、その内容について知っている人は少ない。社会系教科には地域の生活様式に適したようを取り入れ、児童たちに暗記することではなく、身近な地域から学ぶことが重視される必要があると考える。

中国では、長い間の応試教育の影響で一斉型授業が今までも初等教育の第1, 2学年で行われている。また内容にも地域に適したものではなく、中国全体のことを取り入れたものを児童たちが暗記するように教える形で行われている。

第1, 2学年の児童たちに「品德と生活」という教科の内容が暗記することではなく、遊びながら学ぶことに注目し、教育を行うことが考えられる。社会系教科については、中国では、道徳がもっとも必要なことに道徳教育を特別に設定することが望まれ、地理と歴史の内容を社会系として行われると授業時数が多くなり、地域に適した内容を取り入れることに児童の興味・関心を高めることができると考える。

## 注

- 1) 旗とはモンゴルの土地と人民を編成する行政単位（ホシヨウ）であり、他の省における県と同じレベルである。
- 2) ソムとはモンゴルの土地と人民を編成する行政単位であり、他の省における鎮や郷と同じレベルである。
- 3) ガチャーとはモンゴルの土地と人民を編成する行政単位、町、村と同じレベルである。

## 引用文献

- 岡本雅享（1999）：『中国の少数民族教育と言語政策』，社会評論社，590p.  
木村元（2012）：『日本の学校受容—教育制度の社会史』，勁草書房，400p.

## Subjects of Social Study in Primary Education in Minority Area, China

—A case of Naiman Guribanhua Center Elementary School in Inner Mongolia—

Honglan

Key Words: Minority, Primary Education, Social Study, Moral Education, Inner Mongolia, China